

7 聴覚障害 [中等度難聴] がある G 男 (6 年生)

学習・行動上の特徴

生後10か月に「伝音性中等度難聴¹⁶」と診断され、補聴器を装用。

全般的な知的障害も疑われ、斜視・乱視がある。また、喘息・アトピー性皮膚炎を患っている。

注意の集中が持続せず、また周囲の刺激に影響されやすい。

こだわりや不安感・依頼心が強く、周りの状況判断ができにくい。

興味をもつ対象に偏りがみられる（電車や高速道路・道路情報・事故事件・報道関係など）。ラジオアナウンサーの口調を好んでまねをする。

手先が不器用。体のバランスがうまくとれず、動きがぎこちない。運動を苦手としている。

特徴の考察

補聴器は、不要な音も感知するため、聴き取るべきことがわかりにくく、注意を集中しにくい状況もあるのではないかと考えられる。

～ 斜視や乱視のため、難聴でありながら相対的に聴覚優位になっていると考えられる。また動作面での困難は、難聴に加えて視覚による周りの状況把握がうまくできないで、適切な行動がとりにくいことも考えられる。

ラジオ好きな本児には、口調がパターン化しているニュースは、印象強く、また、なじみやすいので情報源として入りやすいと考えられる。

援助・指導の方針

本児には、全般的な知的障害も疑われ、固執性や注意集中困難がみられる。また伝音性中等度難聴に対する配慮も必要である。

本児の場合、包括性のLDと考えられる。言語面では、ことばの理解や論理的な思考力に弱さがあり、非言語面では、空間認知・運動に問題がある。

小集団指導での機会をとらえ、ロールプレイなどによって社会性や判断力を養っていきたい。

特定の物や事柄に対する「こだわり」は、単なるわがままではなく、情報処理のための中枢神経系における障害があって生じている場合がある。時期・状況・対象を把握し分析することにより、共通にみられる要因や特徴的な背景をさぐり指導したい。

留意点

本児については、学習の達成状況に応じた内容を選び、具体的な教材・教具の操作活動を主とする学習を通して理解をさせる。

本児の学級内での不適応状況の軽減のために、学級担任との連携を図りたい。また問題事象が発生した場合には、適宜、学級や学年への指導を行う。

保護者との教育相談をすすめ、本児の情緒の安定を図る。

援助・指導例

(指導担当) 通級指導教室担当

(指導形態) 個別指導 週1回 ・小集団指導〔4名〕 月1回 ・教科への入り込み個別指導

ア ねらい

適宜

注意集中力の改善を図る。

言語理解、表現力、社会性を向上させる。

手先を使うこと(微細運動)の苦手意識を改善する。

イ 内容

注意集中 【聴写、一文交代読み】1時間の指導内容を提示し、本児に確認させたり、順番を決めさせ、希望も一つは活動の中に取り入れ、意欲に配慮する。また、指導者の計画も確認させて見通しをもたせる。

言語

ことばクイズ・クイズ作り・短文作りをさせたり、部分を区切った読み取りや、意味調べをさせる。文章完成法の用紙を利用して、表現学習を行う。〔下図〕

コミュニケーション 【ロールプレイ・劇遊び】周りの状況判断の場面を設定したり意欲を示すアナウンサー役をさせる。

運動(微細運動)

折り紙・切り絵工作・けん玉・手遊び・迷路遊びなどをしたり、算数の図形学習の復習でコンパスや定規を使って作図させたりする。

教科の入り込み指導

担任と連絡を取り合い、算数・社会・図工などの本児が苦手とする教科や実習の時間に、在籍学級の授業へ入り個別指導する。

指導後の変化及び考察

ア 変化

課題ごとの集中力が次第に続くようになり、授業中の立ち歩きなども少なくなってきた。また、クイズに興味を示し、よく覚えることができ、クイズ問題を作ることも上手になってきている。苦手な手先を使った活動も、努力しはじめている。

イ 課題

中学進学時の就学指導にかかわって、本児の社会性が大きな課題となってくる。集中を欠いたり、不安定になることがまだあり、様々な活動への消極性もみられるので、自信をもたせるとともに、社会的スキルや判断力を高める援助が今後も必要である。

